

「雰囲気」

校長 二瓶 晃一

皆さんは、「あそここの店雰囲気良いよね。でも、あの店は雰囲気最悪じゃない。」「雰囲気に流されてしまった。上手くいかなかった。」等と言ったりしたことがあると思う。また、「〇〇くんがいるとクラスの雰囲気が変わってしまう」等と言ったりしたこともあると思う。

ところで、この「雰囲気」とは何であろうか。

新明解国語辞典によれば、「その場所（に居る人たち）が自然に作り出している、特定の傾向を持つ気分」だそうだ。

これによればある集団の一人一人が熱い気持ちで何かに臨めば、熱気に満ちた雰囲気になるだろう。また、ある集団の一人一人がやる気のない気持ちで何かに臨めば、やる気のない重苦しい雰囲気になってしまうだろう。

ある雰囲気の中に個人としての「私」を置いたとき、「私」はその雰囲気に飲まれてしまう受け身の存在なのだろうか。例えば、全くやる気のない雰囲気の中に「私」が置かれたときに、「私」はやる気のないままで居るしかないのだろうか。一般的にはそう見られるかもしれない。

しかし、私は最近、この雰囲気について違った見方をするようになった。それは、雰囲気は受け身ではなく主体的なものではないかと考えるようになったことである。

私は仕事柄、人前で話すことが多い。数名の前で話すことや数百人の前で話すことなど様々ある。その時に、雰囲気が良い会場では上手く話せるが、雰囲気が悪い会場では上手く話せないなどと考えていた。自分の話の出来不出来が雰囲気によって決まるものだと思っていた。

しかしよく考えてみると、自分の得意分野での話しや万全の準備をして臨んだときには、さして緊張もせず自然体で話しをすることができる。そして、余裕をもって会場の一人一人の顔を見るようにして話すことができる。結果として会場全体が良い雰囲気となっていく。

一方、自分が準備不足のときには、話す内容にも自信がなく、やや緊張気味となる。恐らく顔も強ばってしまっているのだろう。こんな状態のときは、会場も堅く重い雰囲気となってしまう。

このような経験を通して、やはり雰囲気は自分でつくるものだと思うようになってきたのである。恥ずかしながら、50歳を過ぎた年齢になって始めて気づいたのである。

皆さん、私の考えに賛同してくれませんか。自分でやっていることが上手くいかないとき、雰囲気の良いことにしたことありませんか。冷静に立ち止まって考えてみると、自分に責任があったというこはありませんか。この1年間をもう一度振り返ってみてください。